

賭事をめぐる日英比較文化

国際ファッション専門職大学

山本雅男

要旨

本稿はイギリスと日本の賭事方法の違いを分析し、それにより、両国の賭事をめぐる心性の違い、さらには文化の違いにまで展開しようとするものである。イギリス人は何事にも賭けをすると、世界的に通じ相場になっている評言がある。その核心部分を担っているのは「ブックメーカー」という賭事店の存在である。かつては、人びとが個人的に賭けをし合う、「相対賭け」が主体であった。そこに、賭事を仲介するだけでなく、それを商売の手段とする人間が現れた。それがブックメーカーの起源で、現れた場所が競馬場であった。つまり、イギリスの賭事は競馬が発祥であった。その後、賭事はあらゆる事象に拡大したわけだが、競馬とは相即不離の関係にあったということになる。その賭式は独特で、ブックメーカー自身が賭事を行っているといえるものである。他方、日本の競馬もイギリス人居留民により徳川末期に横浜で始まった。その後、紆余曲折を経て、刑法の施行によりあらゆる賭事が違法とされるなかで、競馬が特例措置として認められるようになる。そこで採用されたのが、フランス人発案による「パリ・ミュチュエル方式」であった。今日、あらゆる公営競技で実施されている方式である。これは、賭け者の賭け金をすべてプールし、税金、賞金、運営資金等を控除したのち残金を的中者に比例配分するという方式である。これにより、運営施行者及び国家は安定的な財源を得られることになり、日本の中央競馬会は世界的に抜きん出た資金力を誇るようになっている。以上の諸点を分析することにより、日英両国の賭事心理の違い、さらには国民文化の違いを剔抉しようとするのが本稿の目的である。

キーワード

賭事、ブックメーカー、パリ・ミュチュエル、競馬、賭式

はじめに

イギリスの街を歩いていて気づくのは、馬の姿が珍しくないということだ。ロンドンのオックスフォード・ストリートはこの大都市きっての繁華街だが、騎馬警官の光景は何度も目にした。ホワイトホールの官庁街に行けば、2頭のホース・ガーズが立ち番をしており、傍に寄って触ることもできる。

そればかりではない。東京なら日比谷公園、大阪なら中之島公園にあたるような都市中公園にハイド・パークがある。ここの南辺にロットンロウ (Rotten Row) という全長 1.384 メートルの馬場がある。1690 年に整備され、

19 世紀のヴィクトリア時代には、乗馬や馬車でここを散策するのが上流階級の洒落た余暇であった [Dunton 1896: 30-31]。現在も足慣らしに遊歩する乗馬姿をときおり見かける。公園の北側ビル街に厩舎 (stable) が 2 軒あって、メンバーのほか一般にも乗用馬を貸し出している。

そして、ロンドンはもとより地方の町に行くと、メイン・ストリートに馬や犬、フットボール (サッカー) の大型写真をウィンドウに全面広告している店舗を見かけることが多い。田舎の小村を除いて、ほとんどすべての中心街にこの手の小店がある。看板は出ているが中を窺うことはできない。全面写真も目

隠しの代わりのような。おそらく、外来の観光客には、何を商っているのか分からないだろう。

これがブックメーカー (bookmaker) の市街地店。ベッティング・ショップ (betting shop)、訳せば賭事屋である。イギリスやアイルランド、オーストラリア以外で見かけることはほとんどない業態である。

イギリス人はギャンブル好き、何にでも賭けてしまう人びとであると、よくいわれる。「イギリス料理は不味い」とおなじく、世界的な評言でもある。その根拠ともなっている可視的存在がこのブックメーカーである。それだけに、イギリス文化を考えるうえで等閑視できない指標といえる。

本稿では、賭事を基軸に、ブックメーカーとそれとは異なる賭式 (賭事の方法) とを比較考量しつつ、イギリスと日本の比較文化を試みている。年来の研究課題である「イギリスの余暇に関する研究」にとってノートの一斑ともなる。

1 ブックメーカー

<語義>

まず、語彙の定礎から考えてみよう。OED (Oxford English Dictionary) によると、'bookmaker' の初出は 1515 年。類語である 'bookmaking' はそれより古く 1487 年となっている。ただし、これらはいずれも「製本業」、「製本」の意味である。「賭事」に関しては、それぞれ 1862 年、1824 年となり、なりわいとする人間を指す語意のほうが遅れて登場する。

OED だけでなく、辞典類の一般的傾向であるが、語意の定着は実態を後付けするところがあり、多少の違和感を抱かざるをえない。というのも、後述するように、ブックメーカーの出現は、その年号よりかなり早いことになっているからだ。

つぎに、'book' の意味について見てみる。

'make (keep, open) a book' が「賭ける」を指す成句であるように、ここでの 'book' は「賭け帳」を意味している。つまり、ブックメーカーが賭けを引き受ける (accept) ときに、その商取引を書き留めておくノート状のものを 'book' と称していた／いるということだ。

このことは、いずれ言及するように、ブックメーカーの賭式を如実に示しているのである。いまはコンピューター化されているが、つい 10 年ほど前までは、賭けを受け付けるたびに賭け帳に手書きで記述されていた (イギリスでは「予約する」を 'book (動詞)' というが、これもおなじ系統の語義といってよいだろう)。

ブックメーカーを指す語には、'booky' や 'bookie'、'fieldsman' といった語もある [Hammond 1992: 31]。前の 2 語は愛称、蔑称、両用に使われる。'fields' は「出走馬」を表す独特な用法でもある。

<歴史>

ブックメーカーの扱う賭事対象は、いまやあらゆるスポーツ競技はいうまでもなく、政治や経済、芸能文化と広範囲にわたっている。日本の大相撲も対象にしているのは有名 (日本から申し込むのは違法)。しかし、その発生、経過は競馬の歴史と深く関わっている。

競馬という、イギリス人の生活と密接な関係にある事象がなかったら、ブックメーカーなる業種は生まれなかったといえる。ということは、競馬の競争形態の変化がブックメーカーを生んだということなのだ。

競馬、すなわち競い馬は世界各地で行われていたが、その多くは 2 頭による 1 対 1 の競走であった。イギリスでも、18 世紀初頭まではマッチ・レース (match race) といって 2 頭の対決が主流であった。しかも、1 回の競走をヒート (heat) といい、これを何回か繰り返すのが通例だった (ヒートが成立しないことをデッド・ヒート (dead heat) といったわけ)。

馬を所有するのは、昔も今も資力のあるものに限られていたから、貴顕人士同士が、多くは自ら騎乗し、愛馬の能力を競い合っていたのである。史上最初の統轄機関、「ジョッキー・クラブ (Jockey Club)」の名称は、そういう意味もあってつけられたのではない。

競走の観客となる人びともまた貴顕の人びとで、馬に乗って参集してくる。トマス・ロランドソン (Thomas Rowlandson, 1756-1827) の絵画作品に、互いに騎乗した男たちが声をかけ合ったり、上げた指を合図しながら騒いでいるところの図がある [Longrigg 1972: 81]。集団の向こうに 'Betting Post' の標識が見える。つまり、男たちは賭けの相手を探し、それぞれ賭け金を叫び合っているというわけだ。

この時代のレースは競走当事者だけでなく、見物 (= 賭事参加者) も馬に乗って現れ、かつ競走馬と^{いぞ}挙って併走するのが通例であった。観客スタンドなどという発想はまだない (一定のコースすらない場合も多かった) から、併走する観客が応援を兼ねて (賭け金がかかっている)、大声で囃し立てながら、一緒に移動していた。まことにとって喧しい大騒ぎの光景であつたに違いない。

ところで、賭け場でのやり取りはつぎのとおりだ。

「A が勝てば 3 ペンス！」と甲が言い、「B に 5 ペンス！」と乙が応じ、両者が納得すれば、賭け成立となる。その結果、勝った方に合計 8 ペンスが入る。つまり、甲は A が勝って 2.6 倍、乙は B の勝利により 1.6 倍の収得になる。これは、「3:5」とか「3 / 5」といった表記をされ、いまでもブックメーカーのなかには、こうした表記をしているものもいる (たぶん、この頃は少数で表すオッズという考え方がなかったものと思われる)。また、A・B どちらか一方の馬にそれぞれ異なる賭け金を提示する場合もある。

こうした相対賭けが盛んになると、

それを仲介する人間が現れるのも道理で、それがブックメーカーの原型になっていったと考えられる。だが、発生の真骨頂を促す事態は別のところにあった。

18 世紀の初頭になり、三大根幹馬 (バイアリー・ターク、ダーレー・アラビアン、ゴドルフィン・アラブ) による馬種の改良、すなわちサラブレッドの誕生という画期的な出来事が起こる。ひたすら、速さを追求する脚質の優れた馬の改良がサラブレッドを生んだのだが、そうした動きが広まれば、3 頭以上で改良の進捗具合を試そうとするようになる。競馬が勝負を競う意味だけでなく、繁殖成果の実証機会という機能を持ち始めたのである。

1790 年頃、ランカシャー出身のハリー・オグデン (Harry Ogden) なる人物がニューマーケット競馬場に現れ、商売を始めた [Sidney 1976: 35; Cassidy 2002: 69; White 1994: 34]。かれのひらめきが素晴らしかったのは、出走する馬それぞれに払戻し率 (オッズ) を提示し、しかも不特定者の申し出を引き受けたところにある。もちろん、そのためには、事前によく情報を収集し、勝ちそうな馬には低いオッズをつけ、勝ちそうもない馬には買い気をそそるような効率を示した。

かれの顧客はもっぱら貴顕人士ばかりで、信用賭けを行っていた。後日、馬取引で有名なタタソールズ (Tattersalls) のロンドン事務所で清算を行った [Munting 1996: 89]。一方、下層階級の人びとは地元の酒場であるパブやタバン (居酒屋)、イン (旅籠) などで個人相手のブックメーカーとのあいだで少額の賭けを楽しんでいた。この階級差によるブックメーカーの対応が異なるところに、イギリスにおける賭事の柔軟性がある。

その後、100 年以上ものあいだ、賭事に関する法律が何度も制定されるが、そのたびに何度も法逃れを潜り抜けてきたのがブックメーカーの歴史なのである。ひとつには、階級の下上なく厳正に規制運用をするには、と

りわけ上流階級の人びとから反発が起り、結局は黙殺、黙認とならざるをえなかったということだ [Vamplew 2005: 51]。また、1853 年の「賭事店抑制法 (Act for Suppression of Betting House)」のように、賭事店開店による貧者の被る浪費や被害を防止する目的で制定されたが、その結果、ブックメーカーの商売は地下に潜ることになるという場合もあった [Sidney 1976: 51]。

どの分野でも、規制当局と規制を受ける側との確執は、いつの時代においても^{いたち}騒事の状態になる。ましてや、熱心な支持者が背後に存在するとなれば、事はそう容易に進むことはない。かてて加えて、イギリス独特の階級制という要素が事態をより複雑化し、不可解な歴史を示すことになった。つまり、法の柔軟運用が長く続くことになった。じつに、街中の賭事店が合法化されたのは 1961 年になってからだったのだ。

オグデンを嚆矢とする新たなブックメーカーの画期性は、オッズそのものを商材、商品としたところにある。世はまさに産業革命の真っ直中であって、社会全体が事業、商売のタネ探しに血道を上げていたわけで、ブックメーカーの出現もそれと軌を一にするものであったと見て間違いなからう。

＜業態＞

これまで、一括りにブックメーカーといってきたが、じつは大きく分けてふたつの業態が、そのなかにはあるのだ。

ひとつはウィリアム・ヒル (William Hill) とラドブロックス・コーラル (Ladbrokes Coral) という大企業で、競馬だけでなく、世界中のありとあらゆる事象を賭事の対象として展開している。前者は 1934 年創業で、従業員約 8000 人。国内に 1400 余の店舗を持っている。かつては業界第 1 位だったが、2016 年、第 2 位のラドブロックスがコーラルを吸収。従業員 30,000 人、約 4000 店の業界 1 位となった。この他の中小規模の市

街地店を合わせると、国内には約 9000 店を数えるベッティング・ショップがあるとされる (http://www.en.wikipedia/wiki/Betting_shop 2022 年 7 月 24 日閲覧)。

この市街地店舗は ベッティング・ハウス (betting house) ともいわれ、冒頭で触れた街中でよく見られたところだった。場外賭事を扱うジャンルとして、オフコース・ベッティング (off-course betting) という。

これに対して、競馬場内に店を開く、もうひとつのブックメーカーはオンコース・ベッティング (on-course betting) といわれる。個人か家族で営む零細経営がほとんど。いまでは IT 導入で液晶表示のボードに変わったが、かつては馬名とオッズをチョークで手書きするアナログが主流で、イギリスの競馬場で独特な風景になっていた。そして、売り手と買い手との関係は、客の賭けを引き受ける (accept) というかたちで、往時の相対賭けが遺っているような感じではある。

イギリスの競馬場は、どこも入場料の違いにより 3 区画 (enclosure) に分かれており、それぞれにブッキー (bookie) たちが露店スタンドを出している (小規模のブックメーカーは、まさにブッキーと呼ばれている)。全国に 61 場の競馬場があり、総数 800 のブックメーカーが活動しているといわれる [Vamplew 2005: 51]。

賭事関係の法律により非合法とされたのは場外の賭事店の方で、場内のかれらは黙許、黙認されてきた。というのも扱う券種は WIN (単勝＝優勝馬 1 頭のみ) だけがほとんどだからだ。しかも、1 ポンドないし 2 ポンドの少額。これが規制を逃れてきた所以だろう。

この、勝者 1 点のみを賭けるというところが、いかにもイギリスらしいといえる。大手ブックメーカーでも、中心は WIN にあるところから、イギリスは勝者のみを高評価するところがある。ゴルフやテニスにしても、出場者が何十人いるにもかかわらず最後に

勝った者だけが勝利の栄冠を手にし、1勝となる。また、たとえば、議会選挙にしても、何人立候補しようが、1票でも多く獲得した人間が議席を得る。これは、小選挙区制の最大特長であり、それゆえ、2大政党への傾向を強めざるをえない。ちなみに、小選挙区制を‘The first past the post system’と英語でいうが、‘post’は競馬の‘winning post’=ゴール(決勝線)で、競馬由来の語である。

とにかく、1者のみが勝者で、他はすべて敗者という、じつに単純明快な論理がイギリス人好みとするところといえよう。

<賭式>

賭事におけるオッズは賭金額に対する払戻額の割合を表す。日本では小数表記で示すが、イギリスでは比例式ないし分数で表すことが多い。たとえば、2.5倍なら3:2、3-2、3/2等と、前項は引き受け手側を、後者賭け手側を表す(3+2を2で割る)。前述のように、相対賭けの名残りをいまだに踏襲しているのは明らかだ。つまり、互いに賭け金を出し合って合算額を勝者が総取りするという考え方である。選挙でも相対多数者が投票者、いや有権者全体の総意を表すことになる(ちなみに、イギリスでは比例配分方式の選挙形態はとっていない)。

ブックメーカーのオッズは、かれら独自に出す、いわば商品のようなものである。その算出には取材、調査、隠れた情報の収集そして総合的な判断があった。居並ぶ同業他者が競争相手となり、それらとの商材の競い合いもある。それは、客の購買心を煽るためにも、より魅力的なオッズを提示しようという意図もある。そのために、レース間30分のあいだに、たえず変更することになる。つまり、オッズは発走直前までつねに変わる／変えるということ。これは、後述するもうひとつの賭式とおなじなのだが、決定的に異なるところがある。

顧客は数多いブックメーカーのオッズを

比較考量しながら購入する。ただし、そのときのオッズで払い戻しを受けることができる場所にブックメーカー方式の際立った特徴がある。つまり、その後に数字が変動しても購入したときのオッズが固定しているということ。この方式をフィックス・オッズ・ベッティング(fixed odds betting)という理由がここにある。賭け手の判断にもとづくということだ。

購買時に渡されるのは、馬券というよりは、たんなる通し番号が印刷された紙片にすぎない。売り手の脇で、大判のグラフ用紙にある連番のところに馬番とそのときのオッズが書き込まれるのが見える。これが文字通り‘book-making’された瞬間ということになる。レース後、紙片を持って払い戻しに行くと、馬番とオッズを確認して、相当額が払われる仕掛け。

IT化された現在では、すべてが合理化されて、手渡される紙片には的中したときの払い戻し金額があらかじめプリントアウトされている。これなら、ブックメーカーも面倒な計算をしなくて済むだろう。もはや‘book-make’しなくなっている。いずれ、ブックメーカーの語源は辞書上のことになるだろう。

競馬場内の埒沿いに、色とりどりのパラソルと看板を掲げて店を張るブックメーカーの光景はイギリスならではの風情である。かれらの提示するオッズは、取材力と推理力、判断力の顕在化した商品で、それゆえ、かれら自身も賭けをしていることになる。ときに予想外な結果になれば、大損することもある。ブックメーカーを介した賭事は売り手と買い手と双方が賭事の参加者といえよう[檜垣 2008: 55]。場内外を問わずブックメーカーの利用者が圧倒的多数を占めるのは、イギリス人の嗜好、思考の一端を示していると見て間違いはないだろう。後述する「トート・ベッティング(Tote betting)」との比較では、じつに96%がブックメーカー利用となっており、そのことを証明している[Gill 2021]。

2 パリ・ミュチュエル

イギリスのブックメーカーは、場外の賭店やオンライン運営する大規模な組織から零細な場内露店に至るまで、すべて私企業である。出現から、二百数十年、この間、数々の賭事法にもかかわらず、生き延びてきた。イギリス人の支持があったからにはほかならない。

翻って日本では、明治 40（1907）年の刑法制定以来、賭事は厳しく規制されている。

刑法第 185 条：賭博をした者は、五十万円以下の罰金又は科料に処する。ただし、一時の娯楽に供する物を賭けたにとどまるときは、この限りではない。

同第 186 条：①常習として賭博をした者は、三年以下の懲役に処する。

②賭博場を開帳し、又は博徒を結合して利益を図ったものは、三月以上五月以下の懲役に処する。

同第 187 条：①富くじを発売した者は、二年以下の懲役又は百五十万円以下の罰金に処する。

②富くじ発売の取次をした者は、一年以下の懲役又は百万円以下の罰金に処する。

③前二項に規定するもののほか、富くじを授受した者は、二十万円の罰金又は科料に処する。

賭事に関してはこの三つの条文が法的根拠で厳正に取り締まられている（勝馬投票券＝馬券の発売は富くじ規定に関わるとされるので挙げておいた）。

他方、競馬をはじめ競輪、競艇、オートレースなどの公営競技、通称「公営ギャンブル」に関しては刑法のなかに具体的な規定はなく、別の立法措置が立てられている。いわば刑法の特例措置という扱いである。

各法令は、「競馬法」（大正 12（1923）年）、「自転車競技法」（昭和 23（1948）年）、「小型自動車競技法」（昭和 25（1950）年）、「モー

ターボート競技法」（昭和 26（1951）年）である。

これらの監督官庁は、競馬が農林水産省、競輪とオートが経済産業省、競艇が国土交通省となっている。

日本では民間の賭事を一切禁じることで、一部の競技を公的事業とし、運営、収益を公的管理の下に置いたのである。ごく少数でも非合法活動があれば、厳格な摘発と処罰の対象として封じ込めてきたということになる。

そして、公営競技であることの意味は、競技規則の制定や各種許認可を担う特殊法人や財団等の組織と、じっさいの主催者である地方公共団体とを分け、賭事の施行と収益をそれら公共団体に委ねたところに特徴がある。わけても、中央競馬を運営する日本中央競馬会（以下 JRA）は政府系特殊法人として、一括管理、運営する競馬統轄組織なのである。

賭事の側面からいうと、そうした一元管理にとってまことに都合のよい恰好の方式がある。それがパリ・ミュチュエル（*pari-mutuel*）方式である。

＜語彙と発生＞

「パリ・ミュチュエル」はフランス語で、‘*pari*’は「賭事」を‘*mutuel*’は「相互の」といった意味である（早坂 [1996: 266] ではパリで生まれたからとなっているが、これは間違い）。あえて訳せば、「相互賭け」といったところか。その理由は縷々述べてゆく。

考案したのは、カタルニア出身でパリの興業主ジョゼフ・オラー（*Joseph Oller* [1839-1922]）（https://en.wikipedia.org/wiki/Joseph_Oller 2022 年 7 月 29 日閲覧）。オラーは「ベル・エポック」時代の華やかなパリを演出する仕掛人で、「フォリー・ベルジェ（*Folies Bergere*）」や「ムーラン・ルージュ（*Moulin Rouge*）」「オランピア（*Olympia*）」といった娯楽施設を創設したことでも有名だ。パリの歓楽街でさまざまな企画を実行したなかで、競馬や闘鶏の賭事を引き受けるこ

ともしていた。

そこで思いついた賭事方式が、賭け金を集め (pool)、的中者に比例配分するという至極単純なものであった。1867 年のことだ。

この当時のフランスでは、賭け手同士の相対賭けが主流で、それらを仲介することがあっても、仲介者の安定した利益にはならなかった。また、個人間の取引は合法であったが、それ以外は非合法とされていたこともある。プールされた総額から、一定割合を手数料などとして収得し、残りを的中者に配分すれば、恒常的に利益を希むことができる。プール・ベッティング (pool betting) といわれるこの方式は、しかし、当局の目に留まり、1875 年にオラーはわずか 18 日間だったが拘留されることになった。

その後、この方式はドイツやイタリア、オーストリアなどにも広まり、公認されるようになって、フランスでも合法とされるようになった。いまでは、各国で「トータリゼーター (totalisator)」という名称で一般用語となっている。

いささか付言すれば、この方式は投票者が増えるほどに払戻の計算が複雑になる。そこに登場するもう一人の知恵者がジョージ・ジュリアス (George Julius, 1873-1946) である。かれはイギリス生まれのオーストラリア人で、実業家であり発明家でもあった。当初、選挙の投票数の集計用にと、ある計算器械を開発したのだが、当局から採用を拒否され、持ち込んだ先が競馬場であった。1913 年、ニュージーランドのオークランドにあるエラスリー競馬場で導入されることになった。1914 年には特許も取得している [Automatic Totalisators Limited 1997]。

この方式を前項で触れたブックメーカーのそれと比較して考えてみよう。先述したようにブックメーカーの賭式をフィックス・ベッティング (fixed-betting) といった意味は、オッズが変わっても賭け手は申し込んだときのオッズが保証されるということだっ

た。それは、売り手と買い手の契約が後々まで生きるということだし、賭け手の主体的関わりを確約するという意味でもあった。英語の競馬用語でブックーをレイヤー (layer) といい、賭け手をバックー (backer) というが、この両語はほぼ対立語と認識されている。レイヤーのほうは損害を抑えるために、極端なオッズをつけなくなる。それなのに、イギリス人がブックメーカー方式を好むのは、選択の主体性にこだわることと、ブックメーカーとの対決、勝負に勝とうとするからだと考えられる。

パリ・ミューチュエル方式のオッズもつねに可変的、不安定ではあるが、それは、賭け手にとっては他律的、自動的に変化するものの。かりに意思が働くとするれば、ある特定の対象に賭け手がマスとして集中し、オッズが下がった場合である。賭け手個人も施行者もオッズには無縁。プールが閉じられた瞬間にオッズは決まるのだ。個人の関わり、主体性はどこにもない。そこにプール・ベッティングがイギリス人に嫌われる理由があるといわれる [Magee 2001: 298]。

さまざまな賭事主催者にとって、パリ・ミューチュエル方式が好都合なのは、的中者にプール金全額を払い戻さないところである。ここがブックメーカーとの、制度から見た決定的な違いである。日本がブックメーカーを認めていない所以でもある。つまり、プール金のなかから一定割合を控除した残りを払い戻すことになる。控除のなかには税金 (JRA としては 3400 億円余を国庫納付金として国に納めている。2021 年実績、JRA 発表)、賞金、管理運営費等が含まれる。控除する割合は、各競技組織、また各競争によってわずかな違いはあるが、概ね 25% 前後が通常である。ともあれ、イギリス競馬の賞金額が少額なもの、日本やフランスが高額なレースが組めるのも、理由はここにある [Hammond 1992: 222]。

ようするに、イギリスでは大小のブック

メーカーが賭事を仕切っている（むしろ、イギリス人自身がそれを好む）ため、賭事に投じられた金銭が、競馬ばかりでなく各種競技組織に資金として還流しないということなのである。

じつはイギリスにもパリ・ミュチュエル方式によるトータリゼーター（略称のトート（Tote）が正式名）が存在する。トートは1928年政府によって創設され、競馬場には1929年7月ニューマーケットとカーライルに登場した [Vamplew 2005: 305]。その後も長いあいだ公営であったが、2019年、民営化され、現在はUK トート・グループ（UK Tote Group）が経営母体となっている。

だが、いかんせんイギリスの賭事ファンの嗜好傾向がどうしてもブックメーカーに向かいがちであること（先述のように、占有割合はブックメーカー96%に対して、トートはわずか4%である）、また、そもそも開催の実施主体と競馬場の所有者、賭事の施行体（ブックメーカー、トートいずれも）の主要三者が別働隊であること、これらによって競馬界は、長年、貧窮に喘いできたのである。

もうひとつ、パリ・ミュチュエル方式の特性について書き添えておく。ブックメーカーと賭け手は勝負の関係といったが、このプール方式では、誰も絶対的な勝者にならない。ミクロには損する人、得する人が出るが、投票総数の枠内で富が移動するだけ、マクロに見れば、いわゆる「ゼロサム状態」なのである。的中者の利益はおなじ賭け手仲間のなかにいる損失者の犠牲があって成り立っている。所詮、損益は相互行為にすぎないわけ。だから、'mutuel（相互の）' 'pari（賭け）' というのである。

さて、日本のパリ・ミュチュエル方式について、とくに競馬を中心に見てみよう。どの公営競技もこの方式を採用しているが、イギリスとおなじように、競馬界が先行、先駆けとなっているからだ。

日本の競馬競技は文久元（1861）年、横

浜の外国人居留地内で行われたのが嚆矢とされる。その後、明治21（1888）年当時の日本レースクラブの発売した馬券が、記録上、最初の馬券とされている。これがパリ・ミュチュエル方式であった。おそらく居留地で始めたのはイギリス人が主体であったろうし、賭事が絡まないはずはないだろうし、それまでは、たとえば「ガラ馬券」という宝くじのような方式も行われていたらしい [早坂1989: 101]。ただ、「ガラ馬券」は不正の温床になることから [立川2008: 228]、しだいにプール方式に絞られてくるようになる。

その後、前述の刑法制定（1907年）と競馬法の成立（1923年）によって、公的賭事としてパリ・ミュチュエル方式に決まって行く。この間は、いわば黙認、黙許となっていたわけで [杉本2022: 44]、この辺りの事情はイギリスとよく似ているといえる。それにしても、オラーの考案した方式がかなり短い時間差で日本に導入されたことは注目に値する。政府為政者が、その管理面、収益面にいち早く気がついたということだろう。

これまで見てきたように、相対賭けは小規模な範囲なら有効だが、参加者が増えれば、なんらかの仲介者が求められることになる。また、ブックメーカー方式はかなりの専門知識を要するし、それだけに巧妙な不正や詐偽が生まれる可能性もある。為政者としては、軍馬の改良強化を大義として競馬競技を続けつつ、プール・ベッティングの控除金をもつ魅力は大きかったであろう。

今日、日本が世界でも抜きん出た管理競馬といわれるのも、その端緒からして一貫していたということだ。賭事に関しても、イギリスと日本はまったく異なる道を歩んできたといっていよう。

＜賭式＞

競馬は鼻先数センチでも先に駆け抜けたものが勝つ、勝利ひとつを積み上げることがができる。まことに分かりやすい。ブックメーカー

の賭式がWIN（単勝）に集中しているのは、その何よりの証拠だ。イギリスの賭け手たちの嗜好に合っているというのが根拠にほかならない。

確率からいうと、10頭立てであれば、勝者はどれも公平に10分の1。とはいえ、出走馬の能力（その他さまざまな条件）には完璧な個体差があるから、勝つ可能性には歴然とした差異が生じる。そこで、ブックメーカーはその差異をオッズとして表現し、商品として提示する。可能性の高いものには低い数字を、見込みのないものには大きな数字を打つというわけだ [Hammond 1992: 163]。

これに対して、パリ・ミューチュエル方式では、投票者の数（人気）によってオッズが自律的に決まる。馬の実力とは無関係に、人気の度合いによって数字が上下するという。この方式では、賭け手の集散的な推理力と投票数の多寡がオッズを決める。賭け手による判断の源泉には、評論、実績記録、各種予想などマス・メディアの影響が小さくないことは明らかである。

しかしながらパリ・ミューチュエル方式の特長であり魅力でもあるのは、そこではなく、賭式の豊富、多彩さにこそある。ジョージ・ジュリアスの計算機の発明以来、計算技術の進化とともに、投票方法が複雑に分化、発達してきたのである。これは、賭け手の多様な需要、要求（射幸心）に叶うものでもあった。

そこで、2022年現在、JRAが提供、運用している馬券「勝馬投票券」（以下、投票券）を挙げよう。資料はJRA公開の各種冊子及びホームページに依る。表記は、通称、正式名、英語表記、開始年、購買割合、内容の順。

- ① 単勝（単勝式、WIN、1923、6.2%）
1着入線馬1頭を選択
- ② 複勝（複勝式、PLACE、1931、8.7%）
1～3着以内1頭を選択。ただし、出走馬が5～7頭は2着入線までの中
- ③ 枠連（枠番号二連勝複式、BRACKET

QUINELLA、1963、3.1%）枠番2枠を選択、1着2着入線順は不問。ただし、出走馬9頭以上で実施

- ④ 馬連（馬番号二連勝複式、QUINELLA、1991、14.3%）1着2着入線2頭選択、着順不問
- ⑤ 馬単（馬番号二連勝単式、EXACTA、2002、6.6%）1着2着入線2頭選択、着順指定
- ⑥ ワイド（拡大馬番号二連勝複式、QUINELLA PLACE、1999、8.2%）1着2着3着入線3頭選択、2頭の組合せによりの中
- ⑦ 3連複（馬番号三連勝複式、TRIO、2004、20.1%）1着2着3着入線3頭選択、着順不問
- ⑧ 3連単（馬番号三連勝単式、TRIFECTA、2004、31.5%）1着2着3着入線3頭選択、着順指定
- ⑨ WIN 5（五重勝単勝式、2011、1.3%）
主催者指定の6競走1着入線馬1～2頭選択、競走順指定

以上9種類がJRA発売の勝馬投票券である。この他に地方競馬では「五重勝単勝式」「七重勝単勝式」「トリプル馬単」といった種類もある。

さて、大正12（1923）年の競馬法成立による組織整備や各種許認可制度の制定に伴い合法化された投票券の種類が、100年のあいだに多様に増加したことが上記の一覧から見て取れる。それは主催者の企画力と賭け手の需要の成果でもあった。

イギリス競馬は「王のスポーツ（King's Sport）」といわれるように、貴顕人士の社交の場としての機能をもってきた [山本 2005: 3 以下]。競馬開催をイギリスでは「ミーティング（meeting）」というが、地元の有力者が男女入り混じり、着飾って参集してくる、文字通りの光景を表したものだ。スタンドの上階、招待客や競馬場メンバーの席では華やかなパーティーが催されている（第一競走は

午後2時前後に設定されている)。最近では、それに倣って企業接待のパーティー用大テント (marquee) が場内各所に張られているのが見られる [Fox 2009: 170]。

それに比べると、日本の競馬は、明らかに「大衆競馬」。巨大な大衆参加者によって支えられている。多種類の賭式を進化させてきたのも、複雑な計算式をこなすパリ・ミュチュエル方式を採ったからにほかならない。

もちろん、その複雑さは処理能力の側面だけではなく、賭け手側の予想、推理の拡張を齎^{もたら}したし、賭事の自由度を飛躍的に高めてもいる。レースの結果予想、いわゆる勝馬予想がもつ蠱惑性は、選択の幅を広げ複雑な組合せを加えることで、単純に1着を推理するよりけた違いに増幅、深化した。況や、これに金銭が絡むのだから、魅惑の心理は魔力的なものになるかもしれない。

賭式は上記の方式が基本なのだが、「フォーメーション」とか「軸流し」「ボックス」という、奇想天外ともいえる込み入った組合せを案出させることになった。しかも、それらがわずかに1枚の投票券で済ませられるようになっていく。

一例を挙げると、たとえば全出走馬18頭の三連単組合せは、最大で4896通りになる。現在のところ、払い戻し最高額は2012年8月4日に出た2983万2950円であった。このときは全4080通り中の3892位だったという。これこそ、プール・ベッティングならではの高額配当である。

ちなみに、次週持越し (キャリー・オーバー) のあるWIN5では5億5444万6060円が過去最高額である (2021年3月14日)。このように、組合せの多様化は的中確立の低下を示すのとは反比例して、払い戻し倍率、オッズの高騰を招く。だが、これは日本人の賭博心=射幸心に相応していたというほかはないだろう。

その証拠というか、組合せ数の大きい (当時) 三連単式導入にさいして、「射幸心を煽

る」という牽制や反対の意見があったものの、施行してみると、いまは総発売額の3分の1近く (全賭式中で最多) を占めるようになっていく。いかにも日本人賭け手の嗜好に合っていたかという証しといえる。各賭式の開始年を見ると、人間の射幸心は段階を追いつつ、より刺激の強いものを求めて、留めが尽きないということなのだろうか。とはいえ、さらに組合せ数の飛びぬけて大きいWIN5の購買割合が1.3%と寡少に収まっているところを見ると、賭け手の欲望、勇気、冒険心も及び腰になっているのが窺われる。

とにかく、どの競走でも最終確定後の払い戻し一覧で最高額になるのは、きまって三連単式である。これは投票総数に比して的中者が少ないことの顕われである (払い戻し金額表示は1票100円に対する額)。ようするに当たらないのだ。にもかかわらず、多くの賭け手がこの区分に資金を投入する。配当の多さが夢の先にあることは間違いない。これが射幸心の実体である (もちろん、依存症等の心的障害につながる要素が必須で、個人的な自制や組織的な対症をつねに考慮しなければならない)。

JRAは世界の競馬界でもっとも成功した例といわれている。投票券売り上げは約3兆円に達しており、2位のオーストラリアの2兆4000億円 (ブックメーカーとトータリゼーターの合算) を大きく引き離している [Eclip 2019]。売り上げのうち11%余を占める国庫納付金、つまり税金は国にとっても貴重な安定的財源になっている。政府所管の特殊法人でありながら補助金のない独立採算を維持してきた。また、競走全体として高額な賞金を設定できるのも、すべて大衆の賭金が基礎になっている。貴顕人士たちが拠出金 (stakes) を出し合って始まったイギリス競馬が、それとは大きく異なった形を東アジアで見ることになったというわけだ。JRAもそれを意識して、「公正の確保、信頼の維持」が運営の第一義だと掲げている。

おわりに

馬を競わせるという行為は、おそらく、人間が馬の背に跨った瞬間から始まったであろう。だから、それは、馬が生息可能な土地なら世界のどこででも行われてきたはず。

ところが、いま世界各地で、体系的に整序された形で行われるようになったのは、歴史のどこかで大きな転換があったからだ。筆者のイギリス文化研究が辿りついた先がそこだった。18世紀のイギリス競馬に数々の変化（新しい馬種の開発、統轄組織の設立、施行規則の整備、記録類の創刊、取引体制の確立そして賭事業者の出現等）が興り、現今の体制が芽生えることになった。イギリスが近代競馬の発祥国と広くいわれる所以である。

本稿では、なかでも競馬につきものの賭事に的を絞り、とりわけ賭式の違いをブックメーカー方式とパリ・ミュチュエル方式に集約して考えてきた。しかも、それらが長い歴史のなかで一貫して続いているイギリスと、明治以降に生まれ、いまや世界的に群を抜くようになった日本と、それぞれの文化比較にまで繋げて考察してきた（イギリスでは、ほぼすべてのスポーツに賭事の対象を拡張、網羅するまでになっている）。

視点を変えると、競馬界に起こった上記諸要素の変化が、意図したか否かは別にして、いずれも事業化に結果したことは注目してよい。つまり、どれも利益、収益を齎すことに結びついたと。これは、17世紀から18世紀に勃興してきた資本主義の精神そのものではないか。ブックメーカーの示したオッズが商品という性格を持っていたことは記述のとおり。とにかく、すべての事象が商品としての性質を帯びるようになったのである。カール・マルクス(1818-1983)の『資本論』(1867年)が商品の分析から始まるのも決して故無しではない。

就中、賭事は金銭を投じ、金銭を得る／失

うという、まことにもって単純素朴、簡にして素なる人間行為。これは、資本主義の根幹である市場経済の原理と相通じている。ちなみに、競馬に賭金を「つぎ込む」、これを英語では‘invest’という。いうまでもなく、投資、投機の‘investment’と同系統の語彙である。

投機市場とは（中略）将来の価格の予想にしたがって価格が動く市場として定義される。この点では、投機市場は競馬場にもっともよく似ている。競馬場は勝利する、または入賞するであろう馬に賭ける市場である。賭けを通して、ある特定の馬が勝つであろうと予想する人が多ければ多いほど、馬券業者から得る賭け率はそれだけ低くなる。彼らの予想は、しばしば、間違ふかもしれない、しかし、価格を動かすのは馬の客観的腕前ではなく、予想なのである。[ストレンジ 1988: 157]

投機と賭事の本質をよく衝いている。投機が実体経済から乖離していることはよくいわれるが、まさに思惑で市場そのものが動くのである。このことは株式や債券など資本主義経済にとって必須の自由市場ではどこでも見られる事態。投資の思惑は相応の見返りがつねに期待されるが、つねに損失の危うさを必然としているのだ。資本主義は賭事で成り立っているということになる。

競馬の賭事も、馬の能力やオッズの信頼性、多種情報の確実さ、諸々の予備条件があっても、なお外れることが多々ある。穴馬が出現する可能性をつねに孕む。だからこそ多くの人を魅了してやまないのだろう。蓋然性のないところに賭事は成り立たない。

ともあれ、賭事を経済行為、事業として見たとき、パリ・ミュチュエル方式は中央集権的、官僚主義が強く、合理主義思考のフランス人ならではのシステムだといえる。そして、それをおなじ傾向性をもつ日本の当局が

いち早く採用したのも宣なるかなである。

一方、経験主義的で自己責任重視の自由放任、地方分権意識が強く、なによりも階級社会のイギリスではブックメーカー方式が好適だった。大衆がそれを支持してやまないのが何よりの証し。

競馬は社会・文化を映す鏡なのである。

〈参考文献〉

- 杉本竜 2022『近代日本の競馬——大衆娯楽への道』創元社。
 立川健治 2008『文明開化に馬券は舞う——日本競馬の誕生』世織書房。
 早坂昇治 1989『文明開化うま物語——根岸競馬と居留外国人』有隣堂。
 早坂昇治 1996『馬たちの33章——時代を彩った馬の文化誌』緑書房。
 檜垣立哉 2008『賭博／偶然の哲学』河出書房新社。
 山本雅男 2005『競馬の文化誌——イギリス近代競馬のなりたち』松柏社。

- Cassidy, Rebecca 2002 *The Sport of Kings: Kinship, Class and Thoroughbred Breeding in Newmarket*. Cambridge: Cambridge University Press.
 Dunton, Larkin ed. 1896 *The World and Its People: A Series of Geographical Reading Books*. New York: Silver Burdett.
 Fox, Kate 2009 *The Racing Tribe: Portrait of a British Subculture*. London: Transaction Publishers.
 Hammond, Gerald 1992 *The Language of Horse Racing*. Manchester: Carcanet.
 Longrigg, Roger 1972 *The History of Horse Racing*. London: Macmillan.
 Magee, Sean 2001 *Complete A-Z of Horse Racing*. London: Channel Four.

- Munting, Roger 1996 *An Economic and Social History of Gambling in Britain and the USA*. Manchester: Manchester University Press.
 Sidney, Charles 1976 *The Art of Legging*. London: Maxline International.
 Strange, Susan 1986 *Casino Capitalism*. Oxford: Basil Blackwell. (ストレンジ、スーザン 1988『カジノ／資本主義』小林襄治訳、岩波書店)
 Vamplew, Wray and Joyce Kay eds. 2005 *The Encyclopedia of British Horse Racing*. Abingdon-on-Thames: Routledge.
 White, John 1994 *The Racegoer's Encyclopedia*. London: Collins Willow.

インターネット資料

- Automatic Totalisators Limited 1997 Automatic Totalisators an historic Australian company.
<http://members.ozemail.com.au/~bconlon/atl.htm#top> 2022年8月5日閲覧。
 Eclip 2019「世界における日本の競馬・・・JRAが世界一のわけとは」
<https://www.turfeyes.jp/entry/2019/06/24/142337> 2022年8月10日閲覧。
 Gill, Susannah 2021 Presenting a compelling case for Pool Betting in the UK.
http://world-tote.org/wp-content/uploads/2021/07/Susannah-Gill-The-Tote_WoTA-Webinar_July-2021.pdf 2022年8月1日閲覧。
 Wikipedia n.d. Betting shop.
http://www.en.wikipedia/wiki/Betting_shop 2022年7月24日閲覧。
 Wikipedia n.d. Joseph Oller.
https://en.wikipedia.org/wiki/Joseph_Oller 2022年7月29日閲覧。

(2022年12月5日受理)

Comparative Study of Japanese and British Ways of Betting

Masao Yamamoto

Keywords

Betting, Bookmaker, Pari-mutuel, Horseracing, Way of betting

It is said in the world that the British people are very fond of gamble, placing bets on everything, not just all sports but also political events, Christmas weather, even gender of royal new baby. The origin of their betting, especially the systematic management of way of betting, was at the horseracing in the late 18th century, I investigated before. That is, the appearance of bookmaker at horseracing course was the origin of wager. The history of bookmakers, from big companies, William Hill and Ladbrokes Coral, to trifling stalls beside railings at horseracing course, has long story. I would analyze the way of betting of bookmaker to find their showing own odds as commercial materials, at the first step of this article. On the other hand, the horseracing in Japan started at the end of Tokugawa era, being influenced by the British residents at Yokohama. After that, Japanese horseracing became popular during Meiji era to get governmental authorization by the Act of Horseracing at 1923. Before it, any gambling was strictly prohibited by the Criminal Law at 1907. Therefore the betting system in Japan has been monopolized by the government till now today. The system of betting, named 'pari-mutual,' was introduced from France, being so much different from the way of British bookmaker. It is so-called 'pool betting.' I analyzed its system as well, and concluded the differences between the British and the Japanese wagerers' betting attitude, mentality, and cultural difference of each country.